

書 評

『ロールズ政治哲学史講義』(全2巻)

(ジョン・ロールズ著 齋藤純一ほか訳 岩波書店, 2011年)

小田川 大 典

ロールズがハーバード大で教鞭を執ったのは1962年から1995年までのことであるが、その間にロールズは学部生向けの入門科目として道徳哲学の歴史と政治哲学の歴史についての講義をおこなっている。近年、その講義の内容が、ロールズ自身の講義原稿、受講生のノート、録音テープなどをもとに三冊の講義録として編集・刊行された。バーバラ・ハーマン編の『ロールズ哲学史講義』(2000)、エリン・ケリー編『公正としての正義 再説』(2001)、そして本書、サミュエル・フリーマン編『ロールズ政治哲学史講義』(2007)である。

『哲学史講義』の編者ハーマンによれば、ロールズは、講義をはじめた頃、受講生が自分の講義のノートをとるのに苦労していることに心を痛め、自分の講義原稿を受講生が利用できるよう、自らそのコピーの提供を申し出たという。以来、そのコピーは内々で回覧されることになるのだが、ロールズは自分の講義原稿をバージョンアップし続け、30年の歳月をかけて、ひとつのまとまった作品へと仕上げていった。1970年代後半から90年代前半にかけての——それは『正義論』(1971)の改訂から『政治的リベラリズム』(1993)の刊行に至るロールズ政治哲学の発展史のほぼ全体と重なっている——政治哲学史講義をもとに編まれた本書についてもおそらく事情は同じであろう。本講義録が章立て、節分け、註まで整っているのは、編者フリーマンの力量もさることながら、ロールズ自身のそうした教員としての几帳面さによるところが大きいと思われる。

とはいえ、本書が編集済みの講義録であり、更にはロールズ自身が長年にわたってその出版に少なからぬ抵抗を示しつつけたという事実は

軽視できない。ロールズを説得したハーマンによれば、ロールズが自分の講義録の出版に同意したのは、その最終版をできるだけ多くの読者に提供したいと考えたからだということだが、正直なところ腑に落ちる説明ではない(おそらくロールズは押し切られたのであろう)。フリーマンによれば、収録されている講義のうち、ロック、ルソー、ミル、マルクスについての講義はきわめて完成度の高い講義原稿をもとしたものであるが、ホッブズ、ヒュームについての講義はまとまりを欠いた録音テープをもとに編まれたものであり、補遺として収められているバトラー、シジウィックについての講義は未完である。しかしながら、そうした不備にもかかわらず本講義録が読者の関心を惹きつけるのは、哲学史研究とは明確に一線を画した理論的な哲学研究を志向するいわゆる「分析派」の政治哲学者と目されてきたロールズが、そこでは古典を用いて政治哲学の歴史について講じているからであろう。

ロールズは「私の授業についての若干の見解」(『政治哲学史講義』の「編者の緒言」に抄録)と「バートン・ドレーベン回想録」(『哲学史講義』「編者の緒言」に抄録)において、哲学の古典を読む際に従うべき二つの方針を提示している。ひとつめはコリングウッド的な歴史主義、すなわち問題設定の歴史的な把握の重視である。ロールズは、哲学の歴史は「同一の問いに対する一連の答えの歴史」ではなく「大なり小なり絶えず変化する問題の歴史」であり、それに応じて変化する解決策の歴史」であるというコリングウッド『自伝』の一節を踏まえ、古典を読む際には、当時の歴史的な問題状況を踏まえたと、思想家が取り組んだ哲学的問題をまさに

「彼ら自身が理解していた通りに」設定するよう努めなければならないと述べている。

そしてもうひとつは、いわゆる「思いやりの原理」(Principle of Charity)である。サイモン・ブラックバーンによれば、思いやりの原理とは「ひとの発言は、その真理性と合理性が最大になるように解釈されなければならない」というもので、読み手にテキストを可能なかぎり鮮明かつ整合的に読むことを求めるものである(*The Oxford Dictionary of Philosophy*, 1994)。ロールズは、「学説は、最良のかたちで判断されてこそ、判断されたといえる」というミルのシジウィック論の一節を踏まえ、個々の哲学者の思想は、あくまでもそのテキストに即しつつ、「その最も力強いと考えられるかたち」で、すなわち「彼らのテキストの最も理に適った解釈とみなされるもの」に依拠して提示されなければならないと述べている。「過去の思想家たちが主張してしかるべきだったと考えられること」ではなく「彼らが実際に語ったこと」を、テキストを離れることなく、最大限の哲学的卓越性と整合性を備えた理論として再構成すること。これがロールズが哲学史研究に課した二つ目の方針である。

歴史的な正確さを求めるコリングウッド的な歴史主義と、哲学的卓越性と整合性を備えた理論的再構成を要求する思いやりの原理。マイケル・ズッカートはこうした「過去の哲学の解釈者」と「正義の理論家」という二人のロールズのダイナミックな対話こそが彼の哲学史の魅力だと論じている(“John Rawls, Historian,” *The Claremont Review of Books*, Fall 2002)。だが『政治哲学史講義』の記述は、この二つの方針の関係がもう少し込み入っていることを示唆している。たとえばロック講義の冒頭において、ロールズはコリングウッド的な歴史主義をパラフレーズしつつ、「できるかぎり個々の思想家がもつ思考の体系のなかに自らをおくよう努める」という歴史主義を、彼らが「自分に関係する問い」に対して与えている「おそらく完璧ではないが、きわめて立派な解答」をより優れたかたちで理解するという理論的探究のための手

段として位置づけている。換言するならば、ロールズの哲学史研究において、この二つの方針は拮抗するものではなく、コリングウッド的な歴史主義は、過去の思想家たちの哲学を哲学的卓越性と整合性を備えた理論として再構成するための手段のひとつにすぎなかったのである。

ロールズの哲学史研究における理論的契機の優位は、マイケル・フレイザーも指摘しているように、ロールズが思いやりの原理を、別の「謙虚さの原理」とでも呼ぶべき方針で補っていることにもあらわれている(“The Modest Professor: Interpretive Charity and Interpretive Humility in John Rawls' *Lectures on the History of Political Philosophy*,” *European Journal of Political Theory*, 9(2), 2010)。ここでいう謙虚さとは「自分たちが研究している思想家はつねに自分よりもはるかに賢明であると想定」し、「自分たちが彼らの議論に何か誤りを見出した場合には、彼らもまたそのことに気づいており、したがってそれをどこか別のところで論じているはずだ」と考えることを意味する。歴史的な文脈を踏まえ、テキストに即して思想家の議論を辿っていれば、読者はどうしても誤りや矛盾とおぼしき記述に出くわす。だが、読者よりもはるかに賢明な思想家は当然そのことに気づいているはずで、その思想の全体の中で何らかの対処の可能性を示しているはずである。たとえばルソーの『人間不平等起源論』と『社会契約論』の間には一見したところ矛盾があるけれど、『人間不平等起源論』で否定的に論じられている利己心について(カントがそうしたように)「広い見方」を採用すれば、「ルソーの思想全体の計画」は哲学的な卓越性と整合性を備えた理論として読みうるのだ、という具合に(「ルソー講義一」)。

こうしたロールズ哲学史の特徴は本講義録の随所に見られるが、特に顕著なのはミル講義であろう。ロールズは、歴史的な文脈を踏まえ、ミルのテキストを丹念に検討し、ミルが一方で自由よりも幸福を優先する功利主義を唱えつつも、他方でロールズの「公正としての正義」と実質的に同内容の——幸福よりも自由を優先する

——「近代世界の諸原理」を唱えていることを示し、この両者の緊張関係をどう解すべきかという問題を提起する。果たしてミルは間違っていることを主張してしまったのだろうか。ロールズによれば「ミルのような並外れた才能をもつ人物は、その全体的な教義に関わる基本的なところで誤ることはありえない」。[私はこのことを方法上の指針として述べています。……ある仕方でもテキストを解釈するときに誤りであると私たちが思う場合には、著者もまたそのことに気づいているはずだと考えるのです。むしろ、私たちの解釈が間違っているのだと考えるのです。そういう場合には、その難点を避けるためにテキストをどう読むことができるだろうか、と自問することになるのです]。そして、その「自問」は、ミルの功利主義を「公正としての正義」リベラリズムの一形態として再構成する理論的試みへと読者を導く（その詳細については『政治思想研究』12号掲載の拙稿を参照して頂きたい）。

このようにロールズ政治哲学史の講義においては、一方で歴史的文脈とテキストそのものの検討の重要性が繰り返し説かれているにもかかわらず（ロールズは受講生に学習用のテキストを持参させ、テキストのすべての段落に番号を振らせるところから指導を始めたという）、ここぞというところで顔を出すのは「公正としての正義」の政治哲学者ロールズであった。そのことは本講義録の内容構成からもうかがわれる。シジウィックとパトラーについての「補遺」を除けば、本講義録の本編は、社会契約論の代表的な思想家としてホブズ、ロック、ルソーを、功利主義の代表としてヒュームとミルを、社会主義の代表としてマルクスをとりあげている。ロールズによれば、社会契約論と功利主義が「公正としての正義」リベラリズムの伝統を構成しており、社会主義はリベラリズムに批判的な伝統という位置づけであるが、シジウィック講義の中では、

功利主義の「古典的伝統」（ベンサム－エッジワース－シジウィックの系譜）と「公正としての正義」リベラリズムとの緊張関係が示唆されている。たしかにロールズの思いやりの原理は、ミルの（修正された）功利主義を「公正としての正義」リベラリズムの伝統に包摂することには成功したかもしれない。しかしながら、歴史的な文脈を踏まえ、テキストを丁寧に読んだ場合、ベンサムやシジウィックについて同じような処理ができたとは思えない。

本講義録を読むかぎり、それぞれの時代の歴史的な文脈について解説しながら、テキストを丁寧に読み、古典的な思想家たちの政治哲学についての解釈——それは必ずしもオリジナリティに富んだものではない——を提示していくロールズの講義は、おそらく多くの受講生たちにとってそれほど楽しくも易しくもなかったのではないかと推察される（余計なことをいえば、ごく希にはあるが、学生向けの冗談とおぼしき記述も見られる）。しかしながら、歴史的な文脈とテキストの検討の中で個々の思想家の政治哲学がその亀裂を露呈するとき、「公正としての正義」の政治哲学者ロールズが突然現れ、思いやりの原理でその裂け目を縫合し、いつのまにかリベラリズムという一枚の布へと縫い上げていく。それが本講義録からうかがわれる、ロールズ政治哲学史講義の風景である。おそらく本講義録の第一義的な意義は、それが『正義論』刊行から『政治的リベラリズム』に至るロールズ政治哲学の発展史を読み解くための第一級の資料だということになるだろうが、まずは、この講義の受講生であったというトマス・ネーゲル、トマス・ポッケ、デイヴィッド・ライオンズらがおそらくはそうしたであろうように、なかなか白熱しない政治哲学史の講義につきあいながら、随所で示される政治哲学者ロールズの卓越した針さばきに注視してみるとというのが、おそらくは本講義録の正しい読み方ではないだろうか。